

7 競輪のしくみ

(1) 競輪って何？

競輪とは、地方自治体が開催する自転車競走をいいます。そこでの競技結果を賭けの対象として車券（勝者投票券）を販売することができ、車券売上の75%を当選した人に払い戻し（当選した人たちで売上の75%を山分けします）、残りの25%で運営します。

施設の管理や開催の運営にかかった費用、人件費などを差し引き、残った収益は地方自治体の財源として福祉やインフラの整備等に充てられます。

競馬や競艇、オートレースと並ぶ公営競技の1つです。

また、競輪の開催や競技方法、車券の販売については「自転車競技法」に定められています。

国際的な自転車競技（トラックレース）とは一線を画し、戦後日本独自に発展してきました。

近年、ケイリン（KEIRIN）としてトラックレースの世界選手権やオリンピック種目の1つにもなっています。



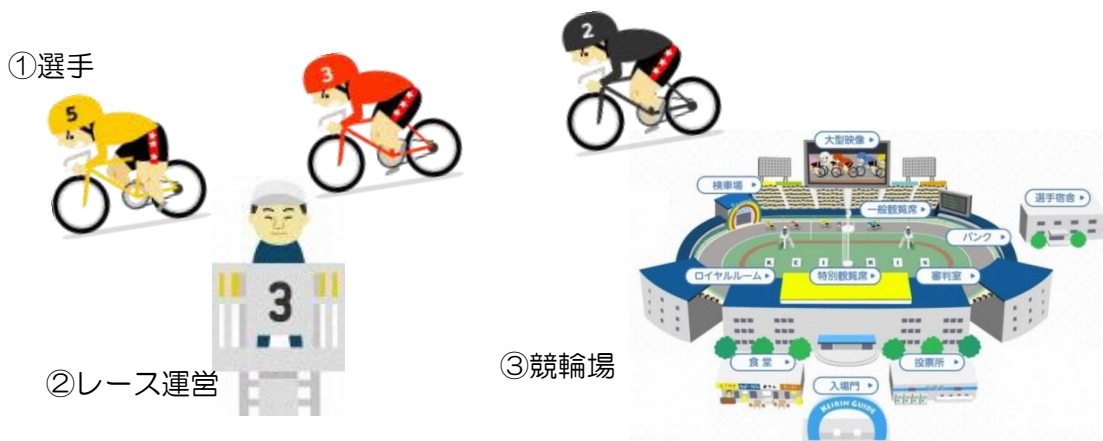
(2) 競輪の開催

競輪は通常3～4日間の日程で開催されます。

レースは勝ち上がりのトーナメント制で1日に11～12R（レース）が行われます。1Rで最大9名の選手が出走します。

競輪を開催するには、①選手はもちろんのこと、競技として公正に行われるための審判をはじめとする②レースの運営、そして適切に管理されている競技をする③場所（競輪場）の大きく3つの要素が必要になります。

そして年間を通して全国43か所にある競輪場でほぼ1月に1回以上のペースで競輪が開催され、その適正な運営管理に多くの人々が携わっています。



(3) 自転車（レーサー）

競輪にとってなくてはならないもの、それは自転車です。
自転車で走り、速さを競うからこそ競輪なのです。馬なら競馬、モーターボートなら競艇、オートバイ（自動二輪車）ならオートレースになってしまいます。

レースで使用する自転車のことをレーサーと呼びます。私たちが普段街乗りしている市販の自転車とは別物です。

その最たる違いは、競輪自転車では、公道を走れないことにあります。なぜか？それはブレーキがないからです。

なぜブレーキがないのでしょうか？

それは速さを競うレースにおいて、ブレーキはいらないからです。

つまり、誰よりも速く走るために余計なものを削ぎ落したものが、競輪で使われるレーサーなのです。

速さを追求した究極のマシーンと言えます。



レーサーは、選手に合うように全てのパーツが綿密にチューニングされてる完全オーダーメイド品です。

1台、40万円ぐらいからと言われます。

重量は約7~8kg。
その材質は、クロムモリブデン鋼（クロモリ鋼）で、溶接が容易ですが、かなりの強度と硬度があるフレームと言われてます。

【特徴】

- ① ブレーキがない・・・ 競走路は楕円形のオーバルコースなので、右折左折の必要がなく、スピードを落とすためのブレーキはいらない。
スピードの調整は、ペダルを踏みこむ力だけで行います。なので、急には止まりません。
公道も走れません。

- ② フレーム . . . 一台一台、ビルダーと呼ばれる職人が作ります。もちろん手作りなので、世界に1つだけのフレームになります。
- ③ 後輪ギヤ . . . 後輪ギヤは1つに固定されていて、変速機（ギヤチェンジ）はありませんし、ペダルも空回りしません。
止まりたい時にはブレーキがないので、スピードが落ちるまで自転車を進めるしかないのですが、ペダルも一緒に回ります。
逆に、ペダルを反対に踏み込めばバックもできてしまいます。
これらの固定ギアの自転車をピスト（piste 仏）、ピストバイクと言います。
- ④ ペダルギヤ . . . ペダル側のギヤも競走時は固定ですが、ギヤ倍数を選択することができます。簡単に言うと、市販自転車のギヤ段数を、走る前に選べるということです。
ギヤ倍数が小さいほど踏み込む力は軽くなり、短時間にトップスピードに到達しますが、持続させるためにはペダルをより多く回転させる必要があります。
その反対がギヤ倍数が大きいものになり、踏み込む力は重くなるのでトップスピードになるまで時間がかかりますが、スピードに乗ってしまえばより高速で走ることも可能になります。
- ⑤ タイヤ . . . タイヤは外径675mm、太さ22mmです。かなり細いです。

(4) 競輪選手

① 選手のクラス（級、班）

競輪選手は、全国各地で開かれる競輪に出場し、賞金を稼いで食べていく、プロのスポーツ選手です。



プロスポーツの世界は賞金を獲得することで生計を立てなければならぬシビアな世界ですが、どのプロスポーツでも、選手の実力に応じてクラス（階級）に分けられ、力が拮抗した中で白熱した戦いが求められます。

競輪界も例外ではなく、特に男子は実力に応じて大きくS級とA級の2つのクラスに分けられます。

さらにS級はS班、1班、2班の計3つに分けられ、またA級は1班から3班までの計3つにと、男子は合計で6つの階層に分けられます。

S級とA級で一緒に走ることはありません。

また、同じ級でも上の班の方が、よりグレードの高いレース（賞金も高額になります）への出場機会が多くなります。

級班の入替は年2回、競走得点（レースごとに着順でポイントが加算される）などにより入替となるため、選手はより上の級班を目指して努力することになります。

② パンツの色

男子のパンツは黒色を基調とします。

級班は、両脇にある線の色でS級とA級を見分けることができます。

S級の線は赤、A級は緑です。

そして、S級の中でも最上位に位置し、9人しかいないS班（S級S班/SS）の選手だけは、赤色を基調としたパンツになります。

遠目でもすぐに分かります。赤いパンツは実力のある選ばれた者の証であり、誇り高い色なのです。

女子のパンツはピンクを基調とします。

女子は人数も少ないことから、級班はL級1班の1つしかないの、全員同じ色のパンツになります。

《選手数と級班の比較》

全選手数	級	級別選手数	班	班別選手数	特徴
2,392名	S級	674名	S班	9名	 赤色 (パンツ) 黒色 (ライン)
			1班	211名	 黒色 (パンツ) 赤色 (ライン)
			2班	454名	
	A級	1,502	1班	495名	 黒色 (パンツ) 緑色 (ライン)
			2班	524名	
			3班	483名	
	ガールズ L級	216名	1班	216名	 ピンク色 (パンツ) - (ライン)

※ ラインに入る星の数は7つ

選手になるには？

競輪選手になるためには、まず静岡県伊豆市（修善寺）にある日本競輪学校に入学する必要があります。

入学試験は、17歳以上で高校卒業と同等以上の学力があれば、自転車競技の経験を問わず受験できます（一般入試／経験の有無で試験内容が異なります）。年齢の上限はありません。

また、入学試験の直近の世界規模の大会（自転車競技だけでなくそれ以外の個人種目も含む）で優秀な成績を収めた者は、特別選抜入試として試験内容が大幅に緩和されます。

そして、競輪学校在学中に国家試験である競輪選手資格検定（経済産業省管轄）に合格、卒業し（合格しないと留年）、一般社団法人日本競輪選手会に加盟する全国いずれかの選手会支部に所属することで、選手として登録され、晴れて競輪選手となれるのです。

③ ユニフォーム

競輪はチームといったものはないので、選手に決まったユニフォームといったものはありません。

そのかわり、レースごとに毎回番号（車番）が割り振られ、車番に応じた決められた色の上着を着ることになります。

ヘルメットも同じ色です。

色を見れば何番かが分かるようになっています。

スポンサーが入る選手もいますが、基本的には無地に番号だけ入ったものになります。

《車番と指定色》

1番車	2番車	3番車	4番車	5番車	6番車	7番車	8番車	9番車
								

ただし、毎年12月30日に開催される競輪界最高峰のレース「KEIRINグランプリ」(GP)に出場した9人の選手は、S級S班となり翌年1年間、胸に特別なデザインの入ったグランプリユニフォームを着てレースに出場することになります。

S級S班の選手はパンツだけでなく、上着でも分かるようになっているのです。

また、グランプリを制しチャンピオンに輝いた選手は、グランプリユニフォームだけでなく、グランドチャンピオンとして翌年1年間は常に1番車に固定されます。

最も速く実力のある選手として、常に白色のグランプリユニフォームにS級S班の赤色パンツで競輪開催を盛り上げることになります。

右の写真では、白い1番車の選手は、前年のグランプリ覇者であることの証に、肩から腕にかけて金色の模様があり、パンツも赤を基調としていることが分かります。

他の選手の単色、黒パンツと比べると一目瞭然です。



車番ってランダムじゃない!!!

車番、つまりどの選手が何番車になるかは誰がきめてるのでしょうか？

それは、審判をはじめレースを運営する公益財団法人JKAの番組編成委員が決めていきます。当然勝ち上がりのトーナメント制のため、前日に決まります。

選手によっては特定の車番でゲン担ぎをする人もいますが、要望は一切聞き入れられません。

ほとんどの場合、1、2、3番、そして奇数の番号に、競争得点の高い選手が割り当てられ、4、6、8番が得点の低い選手になるようです。したがって、4、6、8番が3着までに入ると払戻金が高くなることが多いのです。

毎年12月30日に開催される競輪の最高峰「KEIRINグランプリ（GP）」だけは、その年の実績から最も優秀な9人が選ばれ1発勝負のレースが行われるので、車番は抽選で決めているようです（その年の開催によって変わります）。

ラインって何？

ラインとは、レースごとに選手がチームを組んで走ることです。言わば、即席のチームと考えてもいいでしょう。

ラインは、レース展開の要となり、予想するときの重要な要素となります。

レース出走前（2R目以降は前のレースが終わってすぐ）に、選手たちは必ずバンクを走り、観客の前で「顔見せ（脚見せ）」しますが、どのような並びで走るか、必ずラインを組んで走ることからも、その重要性がうかがえます。

なぜラインを組むのか？

そもそも一昔前まではチームを組んで戦うことは今ほど重要視されていなかったようです。

しかし、1979年の日本選手権競輪（立川競輪場）の決勝戦、ラインができるきっかけとなったレースがありました。

当時、圧倒的走りを見せていたミスター競輪こと中野浩一選手（福岡県久留米市／世界選手権個人スプリント10連覇、特別競輪12勝〔GP1勝、GI11勝〕、賞金王6回〔歴代最多〕）の独り勝ちを阻もうと、千葉県の街道「房総フラワーライン」を練習地としていた選手たちがチームを組み、見事、中野選手の捲りを封じ込めることに成功しました。

その後、地区を中心にチームを組んで戦うことが定着し、フラワーを省略して「ライン」と呼ばれるようになったそうです。

それでは、ラインは何を基準に決まるのでしょうか？

多くの場合、所属する都道府県や地区で決まります。

「福島」の選手の場合、同じ福島の選手や同じ北日本地区の東北あるいは北海道の選手とラインを組むことが多いです。

その他にも、東日本・西日本で組んだり、同門（師匠が同じ）、競輪学校同期生で組む場合などもあるようです。

選手の実力と合わせて、このラインの展開を読んでいくことが、競輪の面白さの1つと言われます。

脚質って何？ 脚の性質？特質？

選手が得意とする走り方のことです。

着順を予想する上でラインとともに重要な要素の1つと言われ、予想紙などの出走表には必ず書かれています。

なお、脚質と似たもので、実際の結果（2着以内）を表す「決まり手」という用語があります。決まり手はレース結果を端的に区分したもので、その決まり手の多さから、その選手の特徴を導き出したものが脚質と考えて良いでしょう。

実際、脚質の判断は、決まり手の多さが1つの目安になっているようです。

脚質は大きく「逃・追・両」の3つに分かれます。

逃	追	両
主にラインの先頭を走る選手のこと。先行選手と呼ばれ、自らレース展開を作り、同じラインの先導役となる。	主に先行選手の後ろについて走る選手のこと。マーク選手、追込み選手と呼ばれ、同じラインの先行選手を守り、さらに勝機を狙う。	逃・追のどちらもこなすことができる選手のこと。自在選手と呼ばれる。

※ まり手の種類・・・逃げ（逃）・捲り（捲）・差し（差）・マーク

逃・・・残り1周になった時に、ホームストレッチライン（ゴールラインと同じ）を最初に通過した選手が、そのままゴールした場合の決まり手。

捲・・・残り1周になった時に、ホームストレッチラインを最初に通過した選手を最終4コーナーまでの間に、追い抜いた場合の決まり手。

差・・・概ね最終4コーナー通過後に前を走る選手を抜いた場合の決まり手。

マーク・・・同じラインの前を走る選手を抜けずに、2着でゴールした場合の決まり手。

(5) 競輪レース

① レース全般

競輪は通常、3～4日間の日程で開催されます。

レースは勝ち上がりのトーナメント制で、1日に11～12R（レース）が行われます。

選手が出場できるのは1日1Rと決まっています、初日、2日と勝ち上がり、最終日の決勝R（基本的に最終レース）での優勝を目指します。

1Rで上位3着までが翌日に行われる本選レースに上がっていきます。

3着に入れなかった選手は、翌日に行われる同じ順位者を集めたレース（特選、選抜、一般など）に振り分けられ、その中で勝者を争います。

参加した選手は、レースごとに獲得できる賞金だけでなく、順位によって得られる競走得点を積み上げていくことで、昇級昇班、ビッグレースへの出場、高額賞金の獲得を目指します。

② レースの格付け（グレード制）

選手にクラス（格付け）があるように、開催レースにも格付け（グレード）があります。

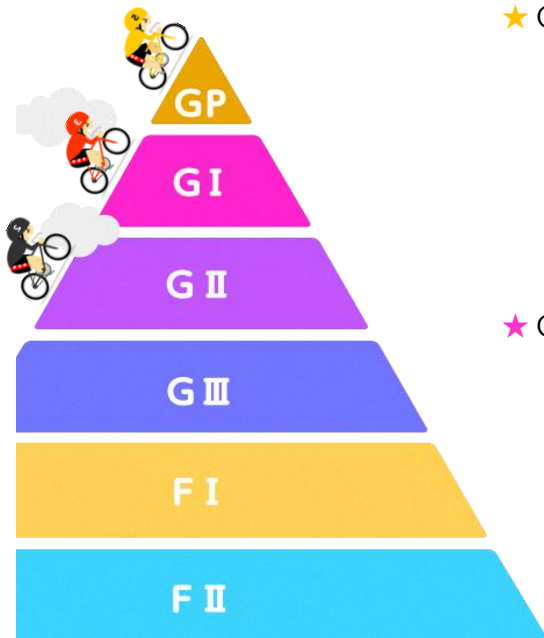
競輪は、毎年年末（12月30日）に開催されるKEIRINグランプリを頂点（その年の最終決戦）として、1年間を通じて様々なグレードのレースが開催されます。

その年のゴールとなるKEIRINグランプリは、グランプリ（GP）を除いた最高グレードのGⅠレース（年6開催）で優勝した選手と、その年の賞金ランキング上位選手から合わせて9名だけが出場でき、真のチャンピオンを決める競輪界最高峰のレースとなります。

賞金額も最高で、優勝者は1億円を獲得することになります。

もちろん、9名だけの1レースで1発勝負です。

ただ、開催としては1レースだけでは寂しいので、通常のFⅠレース（3日間）を併せて開催し、そのうち、初日には女子の1番を決めるガールズグランプリが、2日目には若手の最も優秀な選手を決めるヤンググランプリ（GⅡ）も開催されます。



★ GP (グランプリ)

競輪界最高峰のレース。その年の最も優秀な選手を決める1発勝負で1レースのみを言う。

- KERINグランプリ (単発レース)
毎年12月30日に行われる。

★ GI (ジーワン)

S級上位選手が参加。GI優勝者はGP出場権を獲得する。

- 全日本選抜競輪 (4日制) 2月ごろ
- 日本選手権競輪 (6日制) 5月GW
- 高松宮記念杯競輪 (4日制) 6月ごろ
- オールスター競輪 (5日制) 8月ごろ
- 寛仁親王牌競輪 (4日制) 10月ごろ
- 競輪祭 (6日制) 11月ごろ

★ GII (ジーツー)

GIに次ぐ格付けのレース。

レースごとの選考基準に基づいて選ばれた選手のみが出場できます。

7月ごろ

- サマーナイトフェスティバル (3日制) 9月ごろ
- 共同通信社杯 (4日制) KEIRINグランプリの前日
- ヤンググランプリ (単発レース) 3月ごろ
- ウィナーズカップ (4日制)

★ GIII (ジースリー、キネン)

各競輪場の開設を記念して年に1回開催されるレース。出場できるのはS級選手だけ。

※ GI開催場は、基本的に同じ年度に記念競輪の開催はありません。

★ FI (エフワン)

各競輪場で2カ月に1回程度開催するレース。

S級シリーズとして、S級選手とA級1班・2班の選手が出場します。

3日制または4日制で、1日に11Rから12R行われます。1日の前半1R~5、6RがA級レース、後半がS級レースになります。S級選手とA級選手が同じレースで走ることないので、最終日の最終RがS級決勝、その前のレースがA級決勝となることが多いです。

★ FII (エフツー)

各競輪場で2カ月に1回以上開催するレースで、A級選手限定のレース。

午前中の時間帯に行われるモーニング競輪や、午後9時から深夜にかけて行われるミッドナイト競輪はFIIのみの開催です。

モーニングやミッドナイトの開催が増えていることもあり、1年を通じて開催数が最も多いレースになります。

★ ガールズケイリン（ガールズ）

ガールズケイリンは選手数が少ないため、ガールズだけの競輪開催は今のところありません。

グレードとしてはFⅠ、FⅡに組み込まれることが多く、1日に2レース程度となります。
最終日の後半（FⅠの場合、S級決勝、A級決勝の前R）に決勝Rが行われることが多いです。

また、男子との区別がつきやすいようにパンツは全選手がピンクに統一され、
競技用自転車もフレームはカーボンに、後輪は基本的にディスクホイールになります。
風が強い日は、影響を受けにくいスポークに変更となる場合もあります。

ファン層も異なり、特定の選手への追っかけファンもいるなど、アイドル並みの選手もいます。注目度も高く、観戦風景も華やかになります。



③ レースの流れ

レースの流れに入る前に、選手は1回のレースでどのぐらいの距離を走るのでしょうか？

一般的には2,000m程度になります。全国43場で最も数の多い1周400mのバンクで5周、短い333mバンク（松戸、伊東など。前橋は335m）で6周、距離の長い500mバンク（宇都宮、大宮、高知など）で4周を走ることに なります。

※ 400バンクでは2,025mが一般的です。

ちなみに、クラスが下のガールズケイリンやA級チャレンジ（A級3班）のレースは距離が短く1,625m。

反対にグレードが上となるG Iの決勝になると1周分（400mバンク）増えて2,425m。

最高峰のグランプリに至っては2,825mとなり、400mバンクで2周分増えることになります。

さて、短くて1.6km、力のある男子で2kmないし3km程の距離をスタートからゴールまでずっとトップスピードで走れるのでしょうか？

さすがにプロでも無理です。

また、競技用自転車（レーサー）はギヤチェンジが付いていないので、どんな選手でもスピードに乗るまで時間がかかります。

さらに、止まっている状態から短時間でトップスピードに持っていくのは足腰に相当な負荷がかかるので選手生命を脅かすことにもなります。

そこで、数周にわたり選手全員が一定の速度になるまでペースメーカー（先頭誘導員）が入ります。

そして、選手たちは、先頭誘導員がコースから外れてはじめて全力で競い合うことになります。

それでは1レースの流れを一般的な展開順に見ていきましょう。

(I) 選手紹介（脚見せ、顔見せ）

レースが始まる前（通常は、前のレースが終わり次第）、選手たちがバンクを2周程度走ります。

競馬でいうと、パドックで直前の馬の状態を見るのに似ています。競馬と違うのは、実際のコース（バンク）を走ることと、レースで実際に並ぶラインを組んで走ることです。

ここで見るべきは、「①どの選手とどの選手が組むのか」、そして「②組んだラインの中で選手たちがどの順番で走るのか」になります。というのは、ラインの先頭は思いっきり風を受けます。余程の体力、脚力がない限りゴール前で力尽き、後ろに隠れていた選手にあっさり抜かれてしまいます。

実力のある選手がラインの先頭にいる時は、そのまま1着で来ると見るのか、その後ろについた選手が抜いて1着になると見るかなど、普段よりも推理力や決断力が必要になったりもします。

さて、観客は選手紹介のラインの並びを参考にして、最終的に何番と何番と何番がどの着順になるかを予想し、そして車券を購入します。

レースによりますが、選手紹介からスタートまで、おおよそ20分から30分の時間がもうけられます。

選手たちはこの時間を利用して集中力を高め、観客は車券購入を終えて声援準備に入ります。

(Ⅱ) スタート直前



出走時間1～2分ほど前になると、選手たちが自転車を携えてバンクに入場してきます。

スタートラインまで来ると選手たちは、自らの手で自転車の後輪を発走機に固定。サドルにまたがりそれぞれのスタイルでスタートを待ちます。



選手入場口は敢闘門やファイティングゲートなどと呼ばれます。競輪場ごとに入場口の位置が異なるので、入場の仕方も競輪場により様々です。

いわき平競輪場はメインスタンド3F一般観客席の真下に入場口があるので、選手の入場からスタートまでの時間が短いという特徴があります。

(Ⅲ) スタートから1、2周

号砲がなり一斉にスタート。

ラインどうしてどのポジションをとるか各選手がけん制しあいます。すぐに先頭誘導員を追いかける者、他の選手を先に行かせようとゆっくりとペダルを踏みだす者と様々です。

先頭誘導員の後方で選手同士がけん制しながらも、選手紹介時で並んだラインをつくりあげ、1列になって周回します。

1列になる理由は誰もが風を受けて体力を消耗させたくないからです。そして、ペースメーカーである先頭誘導員のもう1つの役割が、先頭に立った選手の風除けになることなのです。

(Ⅳ) 残り3周(青板)

残り周回は、ゴール手前で審判員が数字の書かれた大きい板をめくって表示します。

数字だけでなく、色でも分かるように残り3周の時は青色の板、残り2周は赤色の板を使います。

青板あたりを過ぎるとラインごとに動き始めます。

先頭誘導員を抜かすと失格になるので、あくまで先頭誘導員の後方でラインのポジション取りになります。

まずは後ろにいたラインの選手たちが前に動き出し、それを見ながら中盤にいるラインの選手たちも後ろのラインをやり過ぎて、その後ろにつくか、あるいは後ろのラインをけん制して自分たちが前に行くのか、有利な位置の取り合いが静かに始まります。

(Ⅴ) 残り2周(赤板)

このあたりから先頭誘導員を抜かして、さらに位置取り合戦が激しくなってきます。

場合によってはラインが崩れ、1列から2列、3列と並びながら、抜かし抜かされながら、先頭にいる選手はこのまま逃げ切ろうと、また後ろにいる選手たちは離されまいと、あるいは追い抜こうとペダルを踏みこむ力も強くなり、足の回転も速くなっていきます。

先頭誘導員は邪魔にならないよう内側の退避路に入りこみます。

(VI) 残り1周半『打鐘(だしょう・ジャン)』

バックストレッチライン（第3コーナー手前）あたりで、打鐘がはじまります。競輪独特の音といてもいいでしょう。

打鐘の音は、はじめはゆっくりと、そしてだんだんと早く打ち鳴らされます。

鐘が鳴り始めるとレースの見せ場が開幕です。

この鐘の音に合わせるかのように選手たちはスピードを乗せていき、先を行く選手を外側から内側から抜きにかかります。

ラインが活着している場合は、2番手以降の選手が、後ろから追い抜きにかかる選手をけん制します。つまりブロック的な動きをしたりします。

追い抜きにかかる選手はそれを見越して、さらにペダルを踏みこみスピードをあげるか、外側に行こうと見せかけ内側を抜き去るか一進一退の攻防が繰り広げられます。

(VII) 残り1周

鐘の音が消えはじめると、代わりに風を切って車輪の回る音がことさら大きくなってきます。

それは静かな、しかしスピードを出すためだけに極限まで細く軽く作り上げられた鋼の自転車と、鍛え抜かれた肉体が作り出す、人間が自力で出せる最高時速70kmの闘いの音なのです。

ここから動き出す選手もいます。

列の中盤や後にいても、スパートをかけて、みるみる前の選手を抜いていく場面も割と多く見られます。

(VIII) 残り半周そしてゴール

第3コーナーから第4コーナーにかけて角度のきつい傾斜に向かって各選手が突っ込んでいきます。

そこにはきれいに1列で走っていた姿は見る影もありません。

選手たちはぎりぎりまで接近しつつ、あるいは頭や肩をぶつけ合い、追い抜きあるいは並走してゴールに飛び込んでいきます。

ゴール手前ではもはや顔を上げてる選手はいません。

皆、目一杯踏み込むことだけに集中し、最後は1mmでも先にゴールすることだけを考え、腕を突っ張ってゴールに突入します。

そしてゴール！！！！

際どい場面もよくあり、必ず写真判定で確認されます。

ミリ単位で見ますが、同着と判定される場合もあります。

ガッツポーズをする選手、頭をうなだれる選手、どの選手も普段のゆっくりとした走りに戻っていきます。

そして審判の決定が出る前に、選手たちはもと来た入場口に戻っていきます。

闘い終わって敢闘門では、練習中や休んでいる選手たちが、たった今競い合ってきた選手たちを出迎えます。

走り終えたばかりの選手がクールダウンをしている間、次のレースの選手たちがバンクに出てきます。

そして、退場とともに、次の選手たちが選手紹介でバンクを走り始めるのです。